

# め 女 高 遺 跡

發掘調査報告書

1989

掛川市教育委員会

掛川市教育センター





## 序にかえて

緑豊かな原野谷の山々のあいだから掛川市の西城を流れる原野谷川は、その流域にさまざまな段丘や沖積地などが形成され変化に富んだ景観をみせております。なかでも、右岸の吉岡地区から南に広がる広大な段丘一帯は吉岡原、高田原などと呼ばれ、原始時代からの重要な遺跡が包蔵されているところとして広く知られております。

これらの地域は水の便もよく肥沃な土地であるところから農耕に適しており、原始時代には既に大集落が形成されておりました。その後の長い年月を経て今日では茶生産を主産業として生活を営む農業地帯となっております。そして今日では在来種から優れた品種に改植して生産性の向上をはかり経営の安定化に力がそがれております。

しかし、これらの地域一帯は遺跡の包蔵地でもあり遺跡の保存と、その調整には個々の農家はもちろん地域の方々と共に真剣にとりくんでおります。

このような状況をふまえこのたび周到な準備と土地所有者の埋蔵文化財に対する深い理解によって、高田原のなかほどに位置する女高遺跡の発掘調査が実施されました。

発掘調査は慎重におこなわれその結果弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落跡であることが明らかになりました。そこには人々の生活に使った土器、石皿、磁石などが発掘され集落のようすを明らかにすることができました。

私たちは、先人の歩みを知る遺跡の発掘調査は、今日の社会には無益なものとして捉えるのではなく、現代の社会は祖先の知恵が結集されて、長い年月を経て今日に遺された文化遺産の基盤のうえに成り立っていることに認識をもち、留意したいと思います。

生涯学習都市として地道な発掘調査の成果が潤いのあるまちづくりに活かされることを願うものであります。

最後に本書の刊行にあたり関係者のご指導に対し厚く御礼申し上げます。

平成元年3月吉日

掛川市教育委員会

教育長 西ヶ谷 免志雄

## 例　　言

1. 本書は、昭和63年10月13日から平成元年3月31日まで実施した静岡県掛川市吉岡1197—1～2に所在する女高遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、女高遺跡内で計画された茶園改植に先立つ緊急発掘調査で、調査費用の1/2を国、1/4を県の補助金を受け掛川市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査に際しては、土地所有者の山崎金作氏をはじめ周辺土地所有者の方々には、埋蔵文化財に対し多大なご理解とご協力を頂いた。
4. 発掘調査は、掛川市教育委員会の前田庄一が担当した。
5. 発掘作業ならびに整理作業には次の方々の参加を得た。  
石川浩司・永島光男・山本春夫・加藤正雄・鈴木きり・鈴木ひで・山崎まち・山崎すぎ・  
鈴木静江・宮崎順子・中山貞子
6. 本書の執筆・編集は前田庄一が行なったが、土器の実測・トレースは掛川市教育委員会の戸塚和美氏に、石器の実測・トレースは同教育委員会の松本一男氏にお願いした。また、本文中の両遺物についての文章も両氏によるものである。
7. 発掘調査事業業務は、掛川市教育委員会教育長西ヶ谷兔志雄、社会教育課長安達啓、社会教育課専門官岩井克允のもとに社会教育課が所管した。
8. 調査によって得た資料は、すべて掛川市教育委員会が保管している。

## 凡　　例

1. 掃図における方位は、磁北を示す。(1988年12月現在)
2. 本書で使用した遺構名称は次の意味である。  
S D : 溝状遺構 S B : 竪穴住居跡 S H : 掘立柱建物  
S P : ピット S X : 性格不明な遺構
3. 本書で使用した遺構番号は、現地調査時のものをそのまま使用した。
4. 掃図中の遺構で使用したスクリーントーンは、縦を示している。
5. 遺物の番号は、掃図と写真図版と同一である。

# 目 次

序	
例　　言	
凡　　例	
I　発掘調査と遺跡の概要	2
1. 調査に至る経緯と調査の目的	2
2. 調査の方法と経過	2
3. 遺跡をめぐる環境	5
II　調査の内容	6
1. 遺構	6
i ) 溝状遺構	6
ii ) 壴穴住居跡	9
iii ) 掘立柱建物	13
iv ) ピット	14
v ) 性格不明な遺構	15
2. 遺物	19
i ) 土器	19
ii ) 石器	20
III　まとめにかえて	25

## 挿 図 目 次

第 1 図 遺跡の位置と周辺遺跡分布図	1
第 2 図 女高遺跡検出遺構全体図	3
第 3 図 遺構全体図	7
第 4 図 SB01実測図	9
第 5 図 SB01断面図	10
第 6 図 SB02実測図	11
第 7 図 SB02断面図	12
第 8 図 SB01・SB02炉址実測図	13
第 9 図 SB03実測図	14
第 10 図 SH01実測図	15
第 11 図 ピット・SX01実測図	16
第 12 図 SX19実測図	17
第 13 図 SX実測図	18
第 14 図 出土土器実測図(1)	21
第 15 図 出土土器実測図(2)	22
第 16 図 出土土器実測図(3)	23
第 17 図 出土石器実測図	24

## 図版目次

- 図版 I 上 調査前全景（東より）  
下 茶樹抜根風景（西より）
- 図版 II 上 南調査区全景（東より）  
下 北調査区全景（東より）
- 図版 III 上 S B 0 1（手前）・S B 0 2（奥）全景（南より）  
下 S H 0 1（手前）・S B 0 3（奥）全景（北より）
- 図版 IV 上 S B 0 1 全景（南より）  
下 S B 0 2 全景（南より）
- 図版 V 上 S B 0 1 炉址（北より）  
中 S B 0 1 炉址断面（西より）  
下 S P 2 5 内遺物出土状況（北より）
- 図版 VI 上 S P 2 7 内礫検出状況（西より）  
中 S B 0 2 内遺物出土状況（北より）  
下 S B 0 2 全景（東より）
- 図版 VII 上 S B 0 3 全景（北より）  
中 S H 0 1 全景（西より）  
下 S P 8 7 内遺物出土状況（西より）
- 図版 VIII 上 S D 0 2・S X 1 9 土層断面（西より）  
中 S X 1 9 内遺物出土状況（北より）  
下 S X 1 9 完掘状況（西より）
- 図版 IX 出土遺物 (1)
- 図版 X 出土遺物 (2)
- 図版 XI 出土遺物 (3)
- 図版 XII 出土遺物 (4)





第1図 遺跡の位置と周辺遺跡分布図

# I 発掘調査と遺跡の概要

## 1. 調査に至る経緯と調査の目的

女高遺跡が所在する和田岡原（吉岡原・高田原・各和原）一帯に、中原遺跡・瀬戸山遺跡などのようすに縄文時代から古墳時代にかけて営まれた遺跡が数多く存在すること、あるいは春林院古墳・大塚古墳・瓢塚古墳・各和金塚古墳・行人塚古墳などに代表される和田岡古墳群が存在することが知られるようになってから久しい。

これらの遺跡の多くは現在茶畠であるが、近年しばしば茶園改植（茶の品種改良などに伴い、水はけをよくするために地表土と地山土とを転換するいわゆる“天地返し”が行なわれることがある）により遺跡の一部が壊されるという事態もみられ、遺跡の保護に苦慮している。

そこで静岡県教育委員会ならびに掛川市教育委員会では、これら和田岡原に分布する遺跡群を重要遺跡群として取り扱い、地元住民の厚い理解と協力を得つつ昭和54年から毎年のように遺跡の記録保存を目的とした発掘調査を実施している。

女高遺跡についてみると、遺跡地内の茶園では幸いにまだ茶園改植前の状態であったり、古い改植で下の遺跡が温存されていることが多い、これまでに4地点で発掘調査を行なった。調査面積から見ても、徐々にではあるがまとまった広さで調査を行なっている。今回の調査地点でも、茶園改植に伴い遺跡の消滅が免れない状況が生じ、「せめて発掘調査により記録保存を」ということから、国および静岡県の補助金を得て掛川市教育委員会が実施することとなった。

## 2. 調査の方法と経過

発掘調査は、重機による茶樹の抜根から着手した。ひきつづき重機による耕作土の除去にはいった。今回の調査区は面積が狭く、他の場所に排土置き場を求めることができなかつたので、調査対象地を南北に分け、半分ずつ調査を行なうこととなつた。したがつて重機による耕作土の除去も半分に分け行なつた。重機による耕作土除去後は人力の掘削作業に移つた。

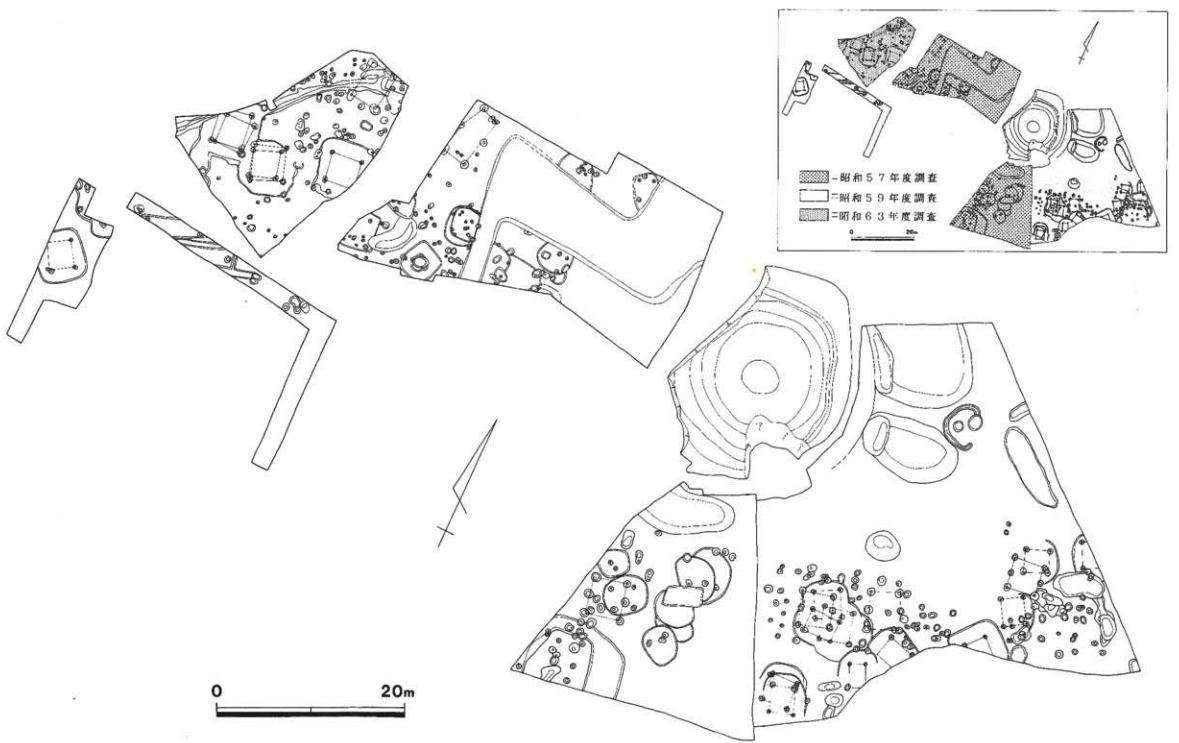
調査にあたつては、調査区の形に合わせて5m方眼のグリッドを設定した。このグリッドの南北方向のラインは、磁北より $35^{\circ}14'$ 東に振れている。遺構等の平面実測は、このグリッドによつた。

現地での図面作成は20分の1の縮尺を基本とし、必要に応じて10分の1の縮尺の図面を作成した。

写真撮影は、6×7カメラ1台と35mmカメラ2台（白黒用とリバーサル用）を用いた。

調査の経過は以下の通りである。

昭和63年10月13日	重機による茶樹の抜根
10月15日～10月18日	茶樹の結束・運搬
10月18日～10月20日	重機による南調査区の掘削・排土の運搬
10月19日～11月9日	南調査区掘削、遺構掘削
11月9日～11月15日	南調査区全景・細部写真撮影、遺構平面図作成、調査区内の片付け
11月15日～11月17日	重機による南調査区の埋め戻し、北調査区掘削・排土の運搬
11月17日～12月1日	北調査区掘削、遺構掘削
12月2日～12月6日	北調査区全景・細部写真撮影、遺構平面図作成
12月7日～12月8日	発掘調査器材の撤収、重機による埋め戻し・整地作業



第2図 女高遺跡検出遺構全体図

### 3. 遺跡をめぐる環境

女高遺跡は、掛川市街地の北西約6kmの通称和田岡原に位置する。この和田岡原は東を流れる原野谷川により形成された河岸段丘であり、女高遺跡はこの河岸段丘の東端に位置し、標高は約48mを測る。現在の原野谷川は、女高遺跡の東約150mのところを流れているが、かつては眼下に眺めることができたであろうと思われる。

さて、今回報告する女高遺跡内では、昭和57年度、昭和59年度、昭和62年度の3回にわたり発掘調査が実施されている。したがって今回の調査が第4次調査ということになる。

ここでは、今回の調査地点とは離れた地点で行なわれた昭和62年度調査は割愛させていただき、昭和57年度調査と昭和59年度調査の成果について触れてみたい。

昭和57年度の調査地点は、今回の調査地点のすぐ東隣（第1区）と第1区より約14m南東に寄った第4区が調査された。

第1区の発掘調査の成果は、第1区行人塚古墳の前方部および前方部周溝の検出であろう。この前方部の検出により、それまで直径約24mの円墳と考えられていた行人塚古墳が、全長約42mの前方後円墳であることが確認されたのである。

第1区からはこのほかに、弥生時代後期最終末と思われる竪穴住居跡10基、時期不明の掘立柱建物、土塙7基、多数の柱穴の検出をみている。

そして、第4区からは弥生時代後期と考えられる竪穴住居跡7基、時期不明の掘立柱建物、方形周溝造構、土塙、ピット状遺構等が検出されたのである。

このように昭和57年度調査は、前方後円墳の検出と前方後円墳築造以前の竪穴住居跡の検出という予想もしなかった成果を挙げることができた。

続く昭和59年度は、行人塚古墳の後円部の東側と今回の調査地の南側が調査された。

行人塚古墳後円部の東側の調査区からは、竪穴住居跡13基、掘立柱建物3棟、方形周溝墓、方形周溝墓状遺構、行人塚古墳周溝が検出された。

この昭和59年度の調査により、後円部側の周溝が2ヶ所で切れることが確認されるとともに、行人塚古墳の規模が、後円部径25.4m、全長43.7mと確定されたのである。

また、古墳時代初頭の住居跡とともに調査区の東端、台地の縁辺部において古墳時代初頭の方形周溝墓が検出されたことにより、住居跡と墓地の関係が明らかにされるとともに、台地の縁辺部にはさらに方形周溝墓が並ぶのではないかと推定されるにいたったのである。

そして、今回の調査区の南側に設定された「L」字状のトレンチからは柱穴と溝状遺構が、「凸」形のトレンチからは3基の竪穴住居跡が検出された。

昭和56年度の行人塚古墳の規模確認のトレンチ調査から出発した女高遺跡の発掘調査は、昭和57年度、昭和59年度の発掘調査により、行人塚古墳の墳形・規模の確認、弥生時代後期の竪穴住居跡の検出、古墳時代初頭の住居跡と墓地の検出という大きな成果を生むにいたったのである。

ひいては弥生時代後期から古墳時代初頭という変革期における和田岡原の集落の一端を垣間見させてくれたのである。

〔参考文献〕(1)松本一男 「行人塚遺跡発掘調査概報」 掛川市教育委員会 1983

(2)松本一男 「女高遺跡発掘調査概報」 掛川市教育委員会 1985

## II 調査の内容

第1章第3節の「遺跡をめぐる環境」のなかでも触れたが、女高遺跡の発掘調査は今回で4次を数えるにいたった。過去に3回実施された発掘調査により行人塚古墳とその周辺の遺構の分布状況とその性格、そして女高遺跡の内容が少しづつ明らかにされつつある。

今回の調査にあたり、行人塚古墳に関連する遺構・遺物の検出・出土、さらに、弥生時代後期から古墳時代前期の集落の一端が現われるのではないかと期待されるのである。

このような期待を抱て発掘調査は行なわれたのであるが、調査地は、約40~50cmの厚さで耕作土が覆い、その下に石錐から山茶碗片までが混じる暗褐色土。そしてこの暗褐色土の下から今回報告する遺構が検出された。遺構の内訳は、溝状遺構（SD）が4、竪穴住居跡（SB）が3、掘立柱建物（SH）が1、その他に建物として抽出することはできなかったが柱穴を多數検出した。

遺物は、縄文時代と考えられる石錐、弥生時代後期の土器、古墳時代前期の土器、鎌倉時代の山茶碗片、近世の陶器片が出土した。

ここでは、遺構、遺物の順で概略を述べる。

### 1. 遺構

遺構は、調査区の南東隅に一部希薄なところがあるが、調査区のはば全域から検出された。

遺構の種類は、溝状遺構、竪穴住居跡、掘立柱建物、柱穴、性格不明な遺構がある。

これらの遺構のなかには、調査区外に及んでいて全容のわからないものが多い。また、今回検出された遺構のほとんどから弥生時代後期~古墳時代前期に比定できる土器片が出土していることからすれば、この時期の遺構とも考えられる。しかし、耕作土下の暗褐色土中より山茶碗の小片が出土していることから、鎌倉時代の遺構が存在する可能性もある。

ここでは、溝状遺構、竪穴住居跡、掘立柱建物、ピット、性格不明な遺構の順に概略を述べる。

#### i) 溝状遺構（SD）

##### SD 01

調査区の西隅1A・1B区で検出された遺構で、確認した長さは約4.5mを測る。確認面の幅は、約1.0~1.2m、確認面からの深さは約0.2mを測る。底面は、北端が南端より約0.1m深くなっている。

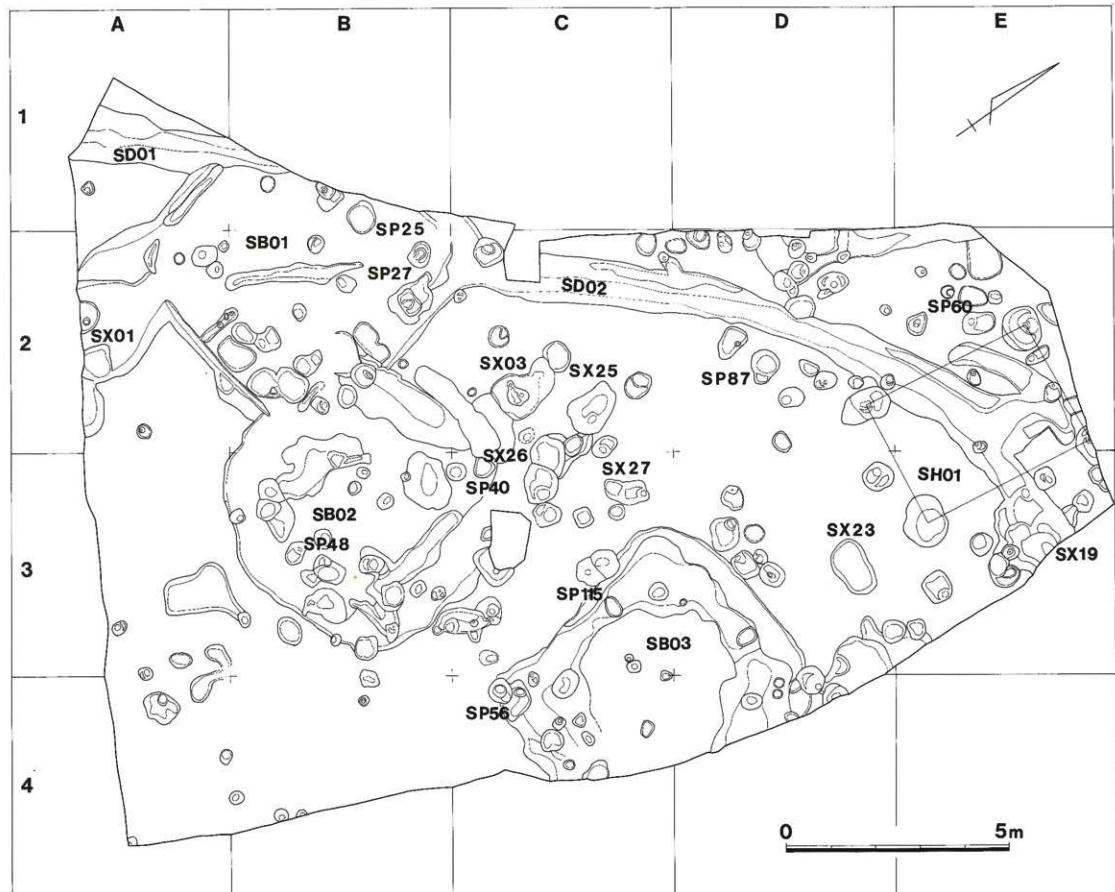
覆土中より18世紀後半に比定できる瀬戸焼の陶器片が出土していることから、近世以降の遺構と考えられ、性格としては、畠の境の溝ではないかと思われる。

##### SD 02

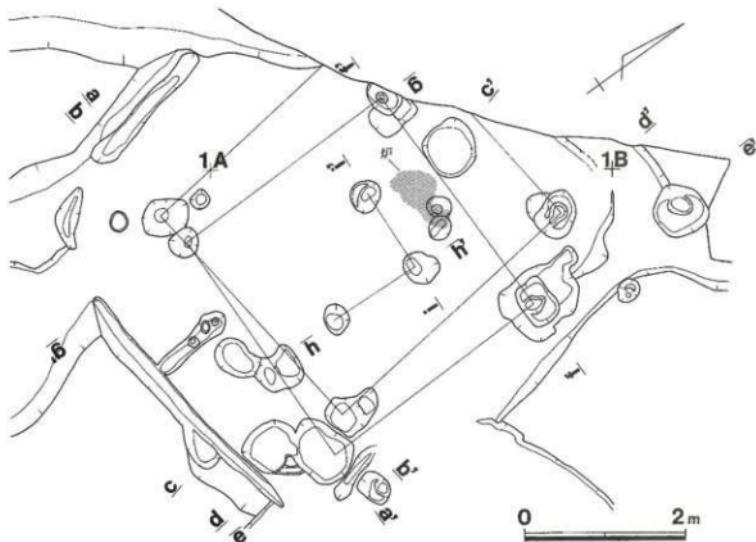
2A・2B・2C・2D・2E・3E区にかけて検出された遺構で、ゆるくカーブをえがく。確認面の幅は、約0.7~1.2mを測り、深さは約0.35mを測る。断面形は逆台形を呈する。底面の深さは、調査区内の東端の3E区内と西端の2A区内とでは、2A区内の方が0.25mほど深くなっている。ゆるやかに西に傾斜しているものと思われる。今回の調査区の西側は、昭和59年度に発掘調査を実施しているが、このSD 02の続きと思われる溝は検出されていない。

時期は、古墳時代前期と考えられるSB 01を切っていることから、古墳時代前期以降の遺構と思われるが、溝内からの出土遺物に乏しく時期の断定はできない。

また、遺構の性格については、丘陵上に存在することから、水利に関係する溝とは考えにくい。



第3図 遺構全体図



第4図 SB 01 実測図

### ii) 穫穴住居跡 (SB)

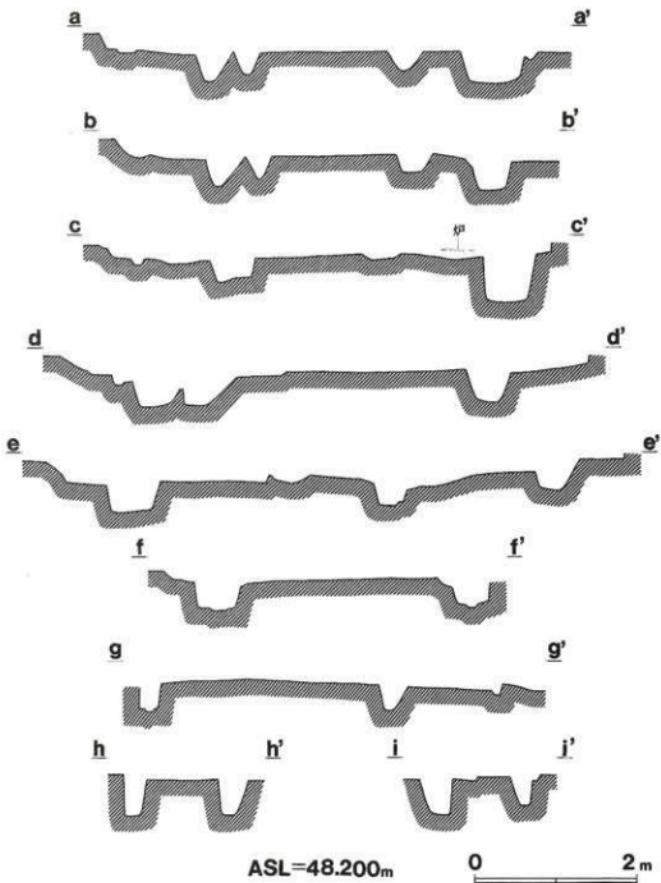
#### SB 01 (第4図・第5図)

調査区の西隅、1A・2A・1B・2B・1C・2C区内で検出された竪穴住居跡で、平面形は方形を呈する。住居跡の北端は調査区域外に及んでいるが、規模は、東西で約6.2m、南北で約6.4mを測る。壁溝は、西壁際と南壁際で検出された。また、南壁の中央やや西寄りで、長さ約1m、幅約0.2m、掘方より0.1mほど掘り込まれた溝を検出した。炉址は、住居跡の中央やや北寄りで検出された。

炉は、3基重複した状態で検出された(第8図)。この3基の炉址を上位から炉(1)、炉(2)、炉(3)、と仮称すると、炉(2)は炉(1)よりも5cmほど低く、炉(3)は炉(2)よりも2cm低くなる。土層断面では、炉(1)に伴うのが1・2層、炉(2)に伴うのが3層、炉(3)に伴うのが4層と考えられる。炉(3)は、固く焼けしまって赤褐色を呈するのみであるが、炉(1)では厚さ3~4cmの粘土を、炉(2)では厚さ約2cmの粘土を貼りつけて使用していた。炉の南には3個の礎が積み重なるような状態で検出された。

遺物は、南壁際の中央部分と東壁際の南端部分から少量出土した。これらの遺物はいずれも細片で完形に復元できるものはなかった。南壁際の中央部分からは、土器、石器(第17図-5)のほかに少量の炭化した木材が出土した。

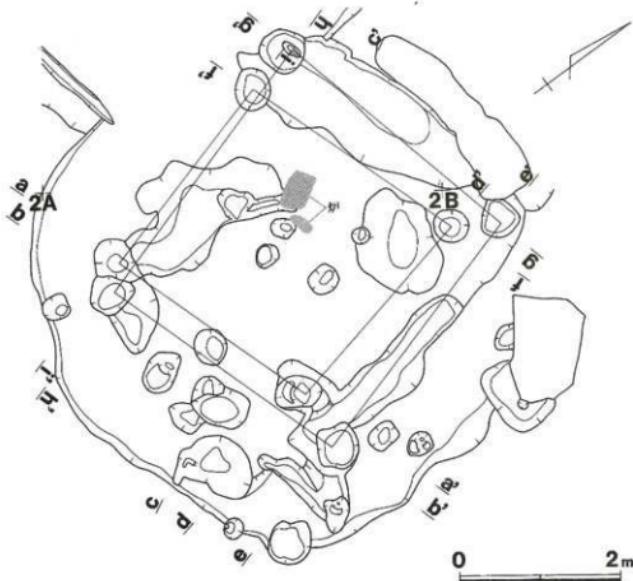
SB 01の床面を平面的に捉えることはできなかったが、住居跡内に設定した南北方向のトレンチでは、土層断面の観察により2面の床面を推定できた。この2面の床面のうち上面の床面は、レベル的に炉(1)に対応するものと思われ、下面の床面は炉(2)か、あるいは炉(2)と炉(3)の両方に伴うものと思わ



第5図 SB 01断面図

れる。現地調査の際には床面の状態で遺物を取り上げることはできなかったが、出土レベルから判断すると、第14図のSB 01出土土器のうち1・3・6・7・8は下面の床に伴い、2・4・5が上の床面に伴うものと考えられる。

SB 01内は建て替えにより多数の柱穴が検出されたが、そのなかから主柱穴として抽出したのが、第4図で示したa-a'・e-e'・f-f'・g-g'を結ぶ4本と、b-b'・d-d'を結ぶ3本である。前者の柱間は、g-g'間が約3.05m、その他が3.15mを測る正方形を呈する。後者は、b-b'間が



第6図 SB 02 実測図

約3.35m、d-d'間が約3.65mの長方形を呈する。

また、SB 01内ではこれらの主柱穴のほかに住居跡のはば中央で「L」字状に並ぶ柱穴列を検出した。この3つの柱穴は、主柱穴と同じ深さまで掘りこまれていた。柱穴間の距離は、h-h'間が約1.2m、i-i'間が約1.1mを測る。

#### S B 02 (第6図・第7図)

2B・3B・2C・3C区内で検出された竪穴住居跡である。2B区内でSB 01に切られている。平面形は、東西約6m、南北約5.8mの隅丸方形を呈する。

住居跡の中央北寄りで2基の炉址が検出された。2基の炉のうち南の炉は単に粘土を貼っただけのものであったが、北の炉は粘土をドーナツ状に貼りつけたものであった。この粘土帯の内面は、焼け赤褐色を呈し、比較的固くしまっていた。この炉址の下の2層は、焼土ブロックが多く混じっていた。この2層は、南側の炉を切るような状態で検出された。南側の炉址の下の5層には炭が、7層には焼土ブロックが混じっていた。

検出された掘方は、住居跡の中央部分が高く、柱穴の位置するあたりから壁際にかけてドーナツ状に掘りくぼめられていた。

床面下の明褐色土(7層)には焼土ブロックが混じっていた。また、ドーナツ状に掘りくぼめられた部分ではこの明褐色土の下に厚さ約0.1mの暗褐色土が存在したが、この暗褐色土中にも炭・焼土ブロックが混じっていた。

主柱穴は2通りが抽出された。

1組みがa-a'・d-d'・f-f'・i-i'で、柱間はa-a'間が約2.8m、d-d'間が約2.8m、f-f'間が約3m、i-i'間が約2.7mを測る。

もう1組はこれよりひとまわり大きなb-b'・e-e'・g-g'・h-h'である。柱間はb-b'間が約3.3m、e-e'間が約3.5m、g-g'間が約3.4m、h-h'間が約3.8mを測る。

SB 02から検出された2通りの主柱穴の時間的な前後関係は、床面レベルでb-b'間の柱穴上から疊が検出されたことから、b-b'の組み合せが先行すると思われる。

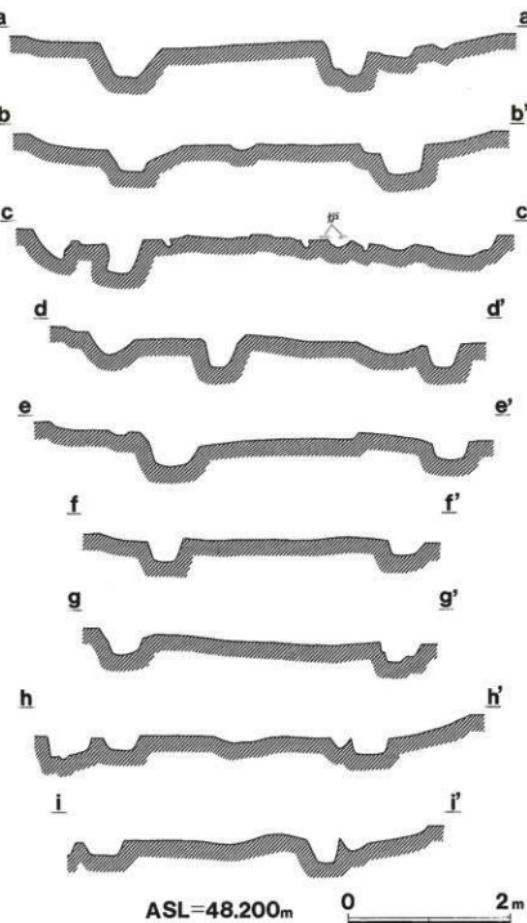
#### S B 03(第9図)

調査区の東端、3C・4C・3D・4D区内で検出された。住居跡の東端は調査区域外に及んでいる。平面形は、東西約5.6m、南北約6.2mの隅丸長方形を呈する。SB 03はSB 02同様、壁溝は検出されず、掘方は緩やかに立ちあがる。

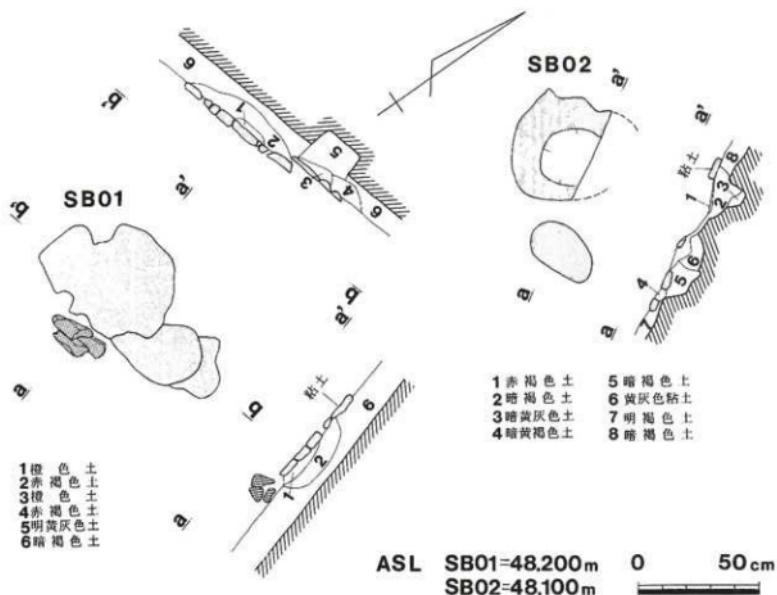
住居跡内の中央部分は掘方上約3cmが残存して

いたのみで炉はすでに失われていた。第17図-4の石器は住居跡の北西隅より出土したもので、この石器の最低点あたりのレベルが床面であったと推定される。

完掘された掘方は、中央部分が高く、主柱の位置するあたりから壁際あたりがドーナツ状にくぼんでいた。高い部分には褐色土が、ドーナツ状にくぼむ部分には土器片の混じる黒褐色土が堆積していた。この黒褐色土は、褐色土を切っていると判断された。



第7図 SB 02 断面図



第8図 SB01・SB02戸址実測図

主柱穴は3本検出された。P-1・P-2間は約3.2m、P-2・P-3間は約3mを測る。住居跡の中央には、SB01同様「L」字状を呈する柱穴列が存在した。柱穴間の距離はc-c'間が約1.3m、d-d'間が約0.7mを測る。3本の柱穴の深さは北西の柱穴が最も深く、北東の柱穴より約0.12m、南東の柱穴より約0.26m深くなる。

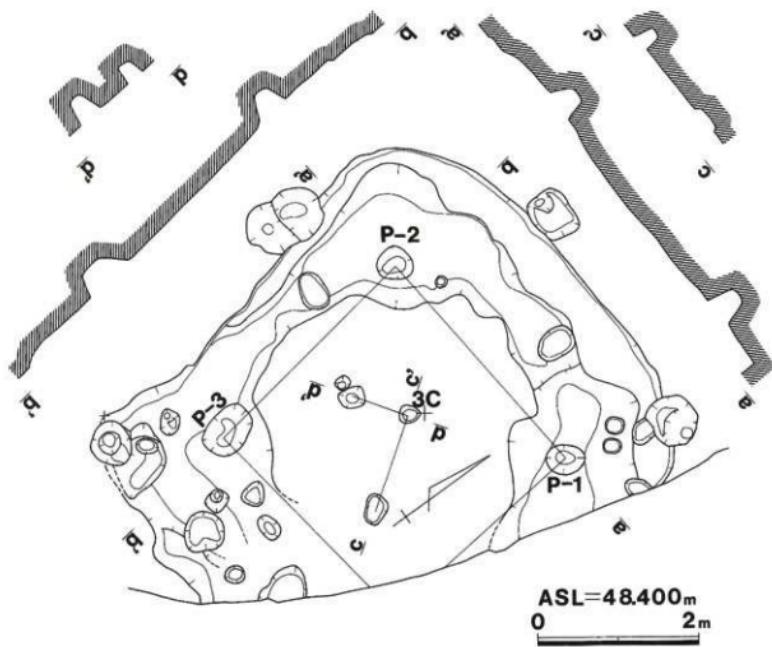
### iii) 堀立柱建物 (SH)

#### SH01 (第10図)

調査区の北端2D・2E・3E区内で検出された堀立柱建物である。東西1間分、南北1間分を検出したが、調査区域外に及んでいる可能性がある。

柱間は、P-1・P-2間が約4m、P-2・P-3間が約3m、P-3・P-4間が約4m、P-4・P-1間が約3mを測り、東西より南北方向に長い建物である。南北棟の建物とすると、主軸方位は、N-8°30'-Eを測る。柱穴の規模は、P-1が径約1m、P-2が径約0.9m、P-3が長径約1m、短径約0.8m、P-4が長径約0.8m、短径約0.75mを測る。確認面からの深さは0.4~0.45mを測る。柱穴の深さは、P-4が最も深く、P-3より約3cm、P-1・P-2より約10cm深くなる。

P-1・P-2・P-3・P-4のいずれの柱穴からも弥生時代後期に比定できる土器片が出土している。また、P-4はSD02に切られている。のことから、SH01の時期を弥生時代後期からSD02開削までの間と考えることができる。



第9図 SB 03 実測図

#### iv) ピット (SP)

##### SP 25 (第11図)

1B区SB 01内で検出された。SB 01の炉址の北約0.1mのところに位置し、長径約0.75m、短径約0.6mの楕円形を呈する。深さは確認面より約0.6mを測る。第14図-11が底面より約0.3m、13が底面より約0.05m浮いた状態で出土した。

##### SP 27 (第11図)

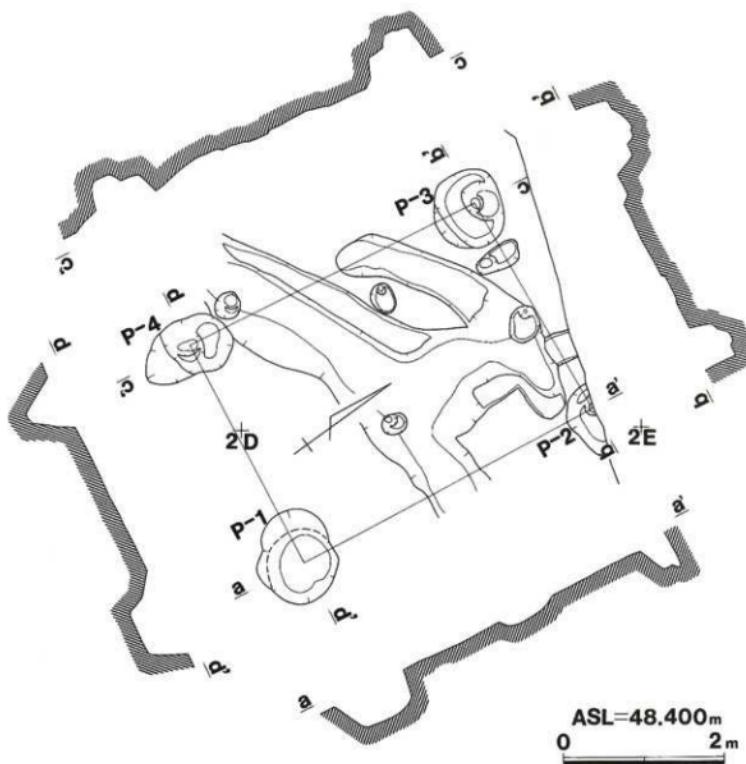
2B区SB 01内で検出された。長径約0.55m、短径約0.45mの隅丸長方形を呈する。底面のはば中央に直径約0.25m、深さ約0.04mのくぼみがあり、その周囲には柱を固定するための礫が入れられていた。

##### SP 48 (第11図)

3B区SB 02内で検出された。長径約0.7m、短径約0.5mの楕円形を呈する。深さは確認面から約0.3mを測る。底面から約0.1m浮いた状態で壺形土器の破片と礫が出土した。

##### SP 87 (第11図)

2D区内で検出された。平面形は、長径約0.65m、短径約0.55mの楕円形を呈する。深さは確認面から約0.35mを測る。第15図-20の土器は底面より約0.15m浮いた状態で出土した。



第10図 SH 01 実測図

#### v) 性格不明な遺構 (S X)

ここでは、溝状遺構・竪穴住居跡・柱穴・土塗に含まれない遺構について述べる。

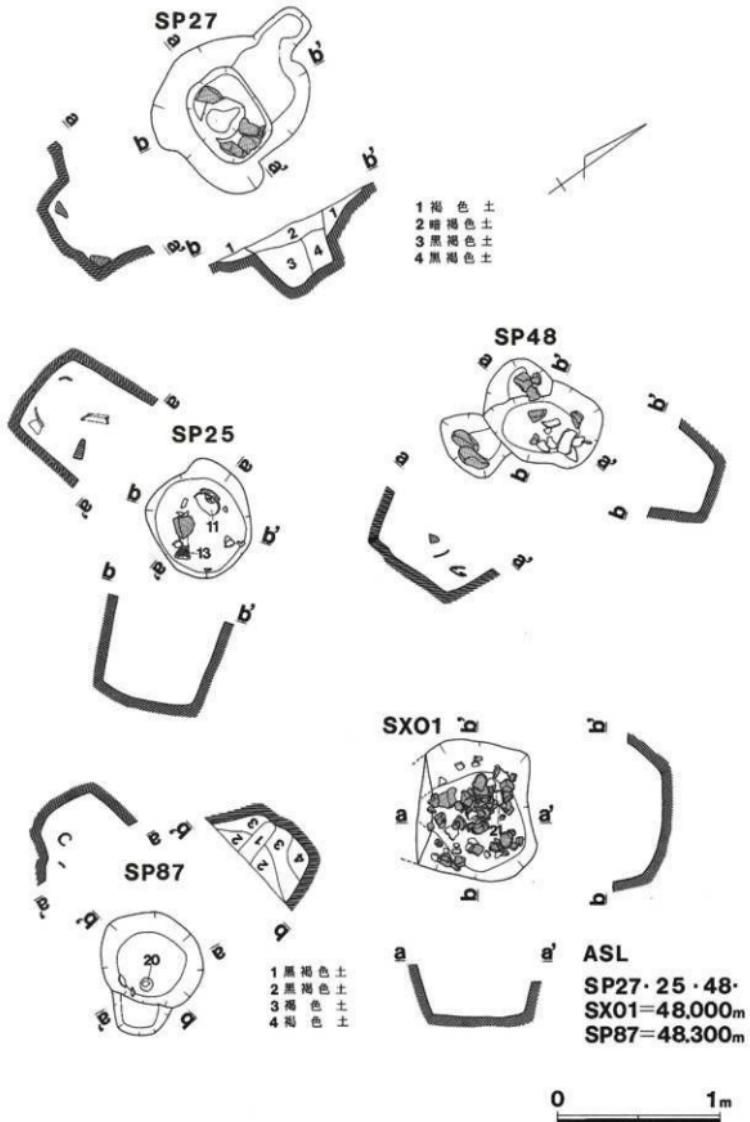
##### S X 01 (第11図)

調査区の西端2 A区内で検出された。遺構の南西隅は調査区域外に及んでいる。調査区内で確認された規模は、東西約0.85m、南北約0.7mを測り、確認面から底面までの深さは、約0.35mを測る。

覆土中には、人為的に投棄された礫・土器が多く混じっていた。

##### S X 19 (第12図)

調査区の東端3 E区内で検出された。遺構の東端は調査区域外に及んでいる。確認面での規模は、長径約1.5m、短径約1.35mを測る。覆土中より比較的まとまった量の土器片が出土したが、これらの



第11図 ピット・SX01実測図

土器のほとんどは7層中からの出土であった。また、8層中からもごく少量の土器片が出土した。7層には炭が多く混じり、9・10層には炭・灰が少量混じっていた。

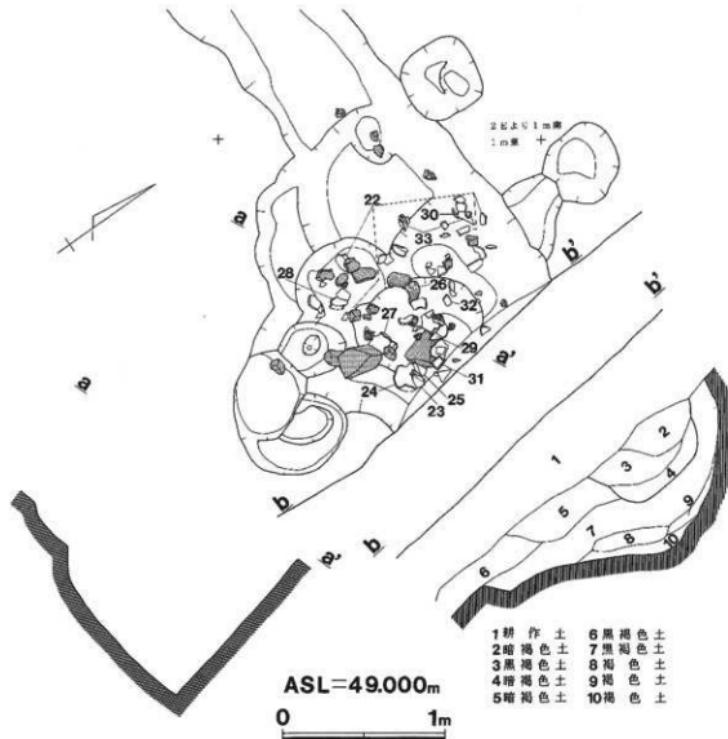
覆土中からは、第15図-22~26、第16図-27~33の土器、第17図-2の砥石が出土した。

#### その他のSX（第13図）

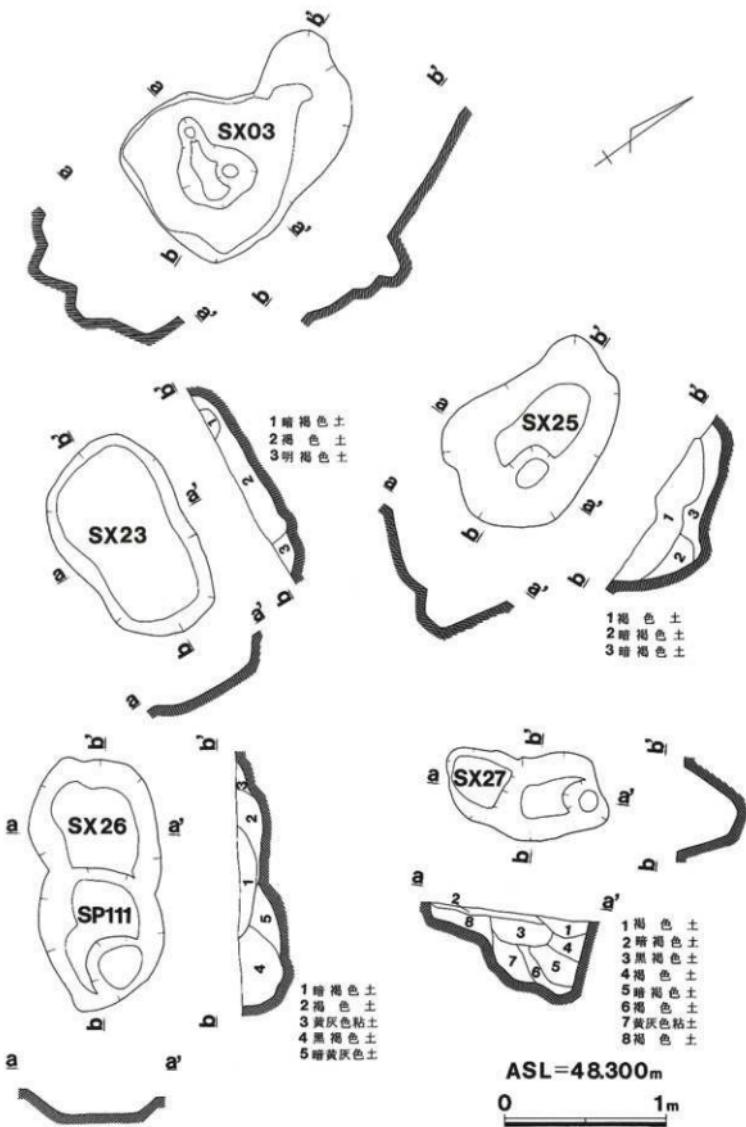
調査区の中央、2C・3C区からは、平面・断面形とも柱穴・土塙とは異なる不定形な土坑が集中して検出された。規模は、最も小さいSX27が長径約1.05m、短径約0.5m、最も大きなSX03が長径約1.45m、短径約1mを測る。これらの土坑は断面形が浅い皿状を呈するSX26と、底面の一部が深くなるSX03・SX25・SX27に分けられる。

SX03・SX26・SX27の覆土中からは、弥生時代後期に位置づけられる土器片が、SX25の覆土中からは弥生時代後期～古式土師器に位置づけられる土器片が出土している。

また、SB03の北約1.7mからは、長径約1.3m、短径約0.8m、確認面からの深さ約0.15mを測るSX23が検出されたが、出土遺物に乏しく、時期・性格とともに不明である。



第12図 SX19実測図



第13図 SX実測図

## 2. 遺 物

今回の調査で出土した遺物は、ほとんどが土器の類でわずかに石器が5点含まれる。出土遺物の総量はポリコンテナ（545 mm × 336 mm × 200 mm）7杯程度と非常に少ないものであった。またその多く（土器）については破片がほとんどであったが、図化に耐え得る資料は可能な限り図化し掲載した。それらが第14図～第16図である。

### i) 土 器（第14図～第16図）

出土土器を時代的に観ていくと、弥生時代後期（菊川式）～古墳時代前期に属されるものが大半を占める。以下番号順に説明していく。なお出土遺構については各図版に示されているので参照していただきたい。

1は折り返し口縁を有す壺形土器である。外面は口唇部に横ナデ、口縁部から頸部上半にかけては縦ハケ、頸部下半には縦位のミガキがそれぞれ施される。内面は口縁部で縦位のミガキ、頸部上半ではナデ、下半では横ハケが施されている。2・3は壺形土器の底部片である。外面には、2はやや摩滅しているがどちらもハケ後ナデ調整が、内面にはハケが施されている。4はS字状口縁を有す壺形土器片で、口縁の屈曲が弱いタイプのものである。外面調整は、口唇部から頸部にかけて顕著な横ナデが、肩部には縦ハケが施されており、その下方には横ハケが確認できる。5～7は台付壺の脚台部片である。外面調整はいずれも縦・斜位のハケが施されている（5は坏部と脚台部の間にナデ気味の連続した指痕痕が認められる）。内面調整は、5・7ではハケが、6ではナデが施されている。8は高环形土器で、坏部の断面形は弧状を呈し、脚部は直線的に開き三方に円形のスカシをもつ。調整は坏部では内外ともに横・縦位のミガキが施され、脚部はやや摩滅しているが縦位のミガキが認められる。9は小型高环形土器の口縁部片で、内外面ともに横位のミガキが施されている。10は小型鉢形土器の底部片で内外面ともにナデが施されている。11はS字状口縁を有す壺形土器で、4同様口縁部の屈曲が弱いタイプのものである。調整は口縁部内外面で顕著な横ナデが、肩部には部分的な縦ハケ調整の後横ハケが施されている。12・13は台付壺脚台部片で、調整はいずれもハケが施されている。14・16は台付壺の胴部と脚台部の接合部で、外面には縦ハケ、内面にはナデが施されている。15は小型壺形土器の口縁部片で、わずかに内彎して開き口唇部は面取りされている。外面では口唇部と口縁上半は横ナデが、上半には縦ハケが施されている。内面には結節繩文が施されているが、一部その後ハケが施されている。17は複合口縁を有す壺形土器片で、外面口縁部には縦ハケが、内面には数段に亘って柳描波状文（押し引き状？）が施されている。18は台付壺の脚台部片で内外面ともに縦ハケが施されている。19は壺形土器底部片で、外面には縦ハケ、内面には横ハケが施されている。20は小型壺形土器で、口縁部を欠損しており、器面の摩滅が著しく調整については不明である。21は台付壺形土器の口縁部片である。口縁部はゆるやかに外反し、口唇部は面取りされ、そこに明瞭な刻目が施されている。その他はハケ目調整が施されている。22は複合口縁を有す壺形土器の口縁部片で、口唇部では面取りされ、そこに顕著な横ナデが施されている。口縁部は外面で縦ハケとナデ、内面では横ハケとナデが施されている。23～30はいずれもS X 19内出土の台付壺形土器である。口縁部の形態と口唇部の刻目によって3タイプに分けられる。23・24は口縁部の立ち上がりがゆるやかで、口唇部の刻目は粗雑で、縦長に施されるもの。25・26も口縁部の立ち上がりはゆるやかであるが、口唇部の刻目は明瞭で入念に施されているもの。27～30は頸部でくの字に屈折し、口唇部の刻目も明瞭なもの。調整はいずれも外面口縁部では縦ハケ、胴部では横ハケ、内面口縁部では横ハケ、胴部では横ハケもしくはナデが施されている。31は鉢形土器口縁部片で、口唇部を折り返し、そこに刻目を施している。胴部

外面は縦ハケ、内面にはナデが施されている。32は高坏形土器の坏部と脚部の接合部片で、三角凸帯が付けられそこに有段（2段）の櫛刺突羽状文が施されている。33～35はいずれも壺形土器の肩部片である。33は上から櫛描波状文、有段（2段）櫛刺突羽状文、櫛描波状文がそれぞれ施されている。そして羽状文刺突後縫円形の浮文が貼付されている（単位は不明）。34は櫛描波状文を挟んで有段（2段）の櫛刺突羽状文が施されている。35は無節の結節縄文と縦・横ハケが施されている。36は壺形土器の底部片で、外面にはハケ後ミガキが、内面には横ハケが施されている。37～39は台付壺形土器の脚台接合部と脚台部で、外面には縦ハケ、内面には横ハケが施されている。40は高坏形土器の接合部で、数段に亘る櫛押圧横線文が入念に施されており、その下方には縦位のミガキが施されている。41・42は鉢形土器の口縁部片である。41は折り返し口縁を有するもので、調整は口縁部で縦ハケの後横ナデが、脣部はやや摩滅しているが斜位のハケが認められる。42は頭部がくの字に屈折し、口縁部はやや膨らむ。口縁部には顯著な横ナデが、脣部には縦ハケが施されている。43も鉢形土器の口縁部と考えられる。41・42のように頭部の屈曲はみられずほぼ垂直に立ち上がる。外面では口唇部から口縁上半にかけて顯著な横ナデが施され、頭部から脣部にかけては縦ハケが施される。内面では横ナデが施される。44は壺形土器の口縁部片で、折り返し口縁を有するものである。口唇部外面にはヘラ状工具による刻目が入念に施されている。口縁部内面には櫛刺突羽状文と羽状文刺突後縫円形浮文が貼付されている（単位は不明）。以上で土器の説明を終わる。

さて今回の調査では、これまでの女高遺跡の調査からは出土例のなかったS字状口縁甕が初めて出土した。出土した4・11はいずれも口縁部の屈曲が弱いタイプのもので、S字状口縁甕をメルクマールとする該期の編年に従えば、古墳時代前期後半に属するものと考えられる。どちらも決して良好な資料とは言えないが、該期の女高遺跡を中心とする和田岡原地域の編年を考える上では、重要な資料と言えよう。

### ii) 石 器（第17図）

今回の調査で出土した石器は、砥石・石錐・石皿（？）等である。以下、挿図に従い説明する。

1は、厚さ3.4cmで円柱状をなし、両面が研かれたようにスベスベしている。しかし、両面には明瞭な研磨痕は認められない。表面から裏面にほぼ円形の有孔が認められるが、孔内の壁面は矢柄研磨のような痕跡は確認できない。以上のような状況であることから、この遺物は積極的に石器として断定できるものではない。しかし、住居跡からの出土例であり、その他の目的のために使用された可能性があることから紹介した。

2は軽石製で平坦面を多くもつ多面体の遺物である。それぞれの面には数条の擦痕が認められ、砥石（研磨器）と考えられる遺物である。擦痕は、それぞれの面で異なった太さを示している。この遺物は、S X19内からの出土である。

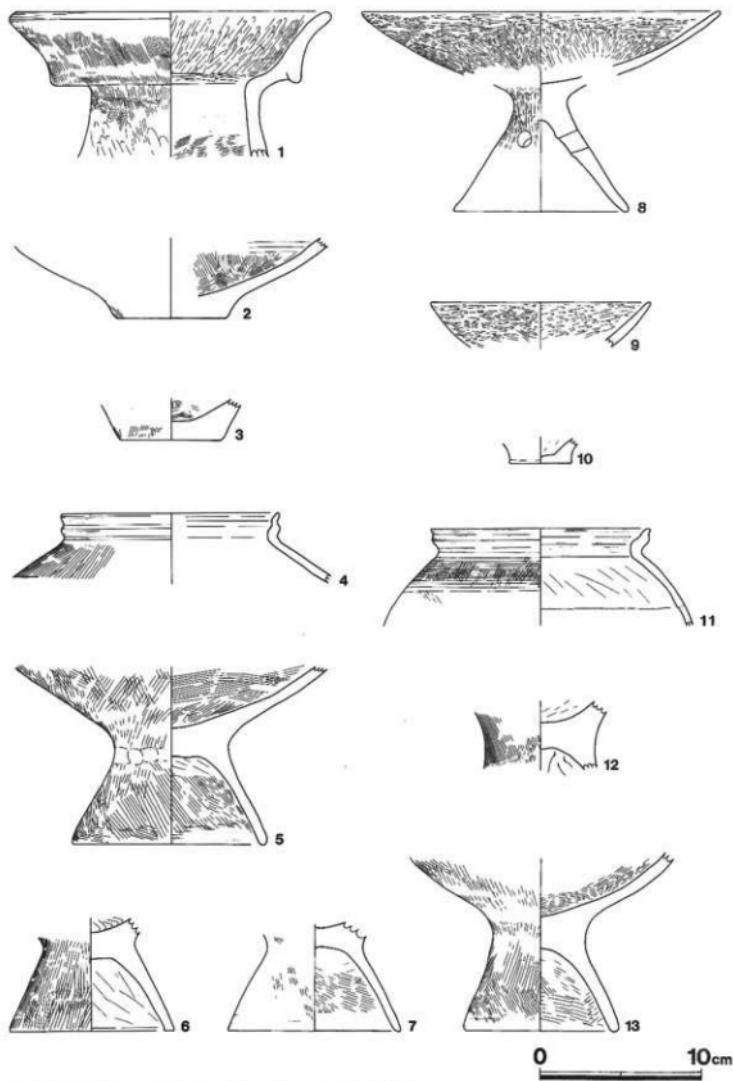
3は、繩文時代によく観られる形の石錐で、天・地両端に打ち欠き痕がある。直径4.1cmで、ほぼ円形を呈す。3B区からの出土である。

4は、長さ35cm、幅23.7cm、厚さ7cmの大きな板状の遺物である。表裏両面には、紐等で縛ったような痕跡が確認できる。また裏面には、硬いもので敲打した痕跡が認められる。SB 03内からの出土資料である。

5は、裏面および片面を欠損した遺物であるが、4同様板状を呈す。表面全体がスベスベしており2方向の擦痕が確認できる。

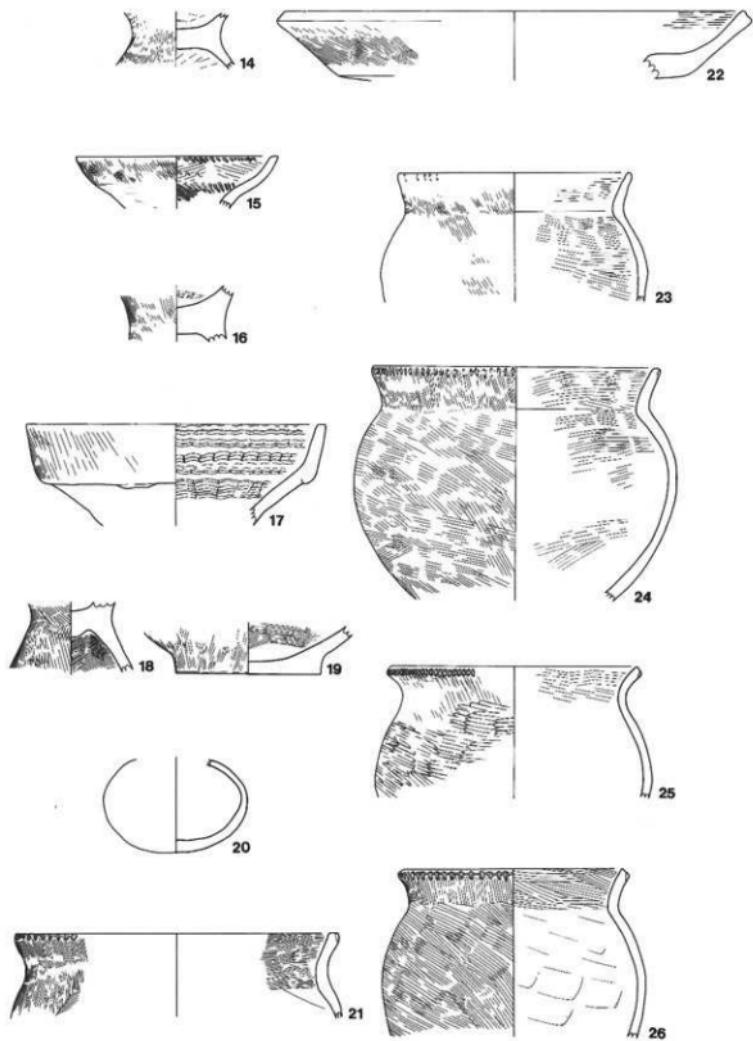
《参考文献》 (1) 水島和弘・鈴木敏則ほか「三沢西原遺跡」 菊川町教育委員会 1985

(2) 松本一男 「女高遺跡」 掛川市教育委員会 1985

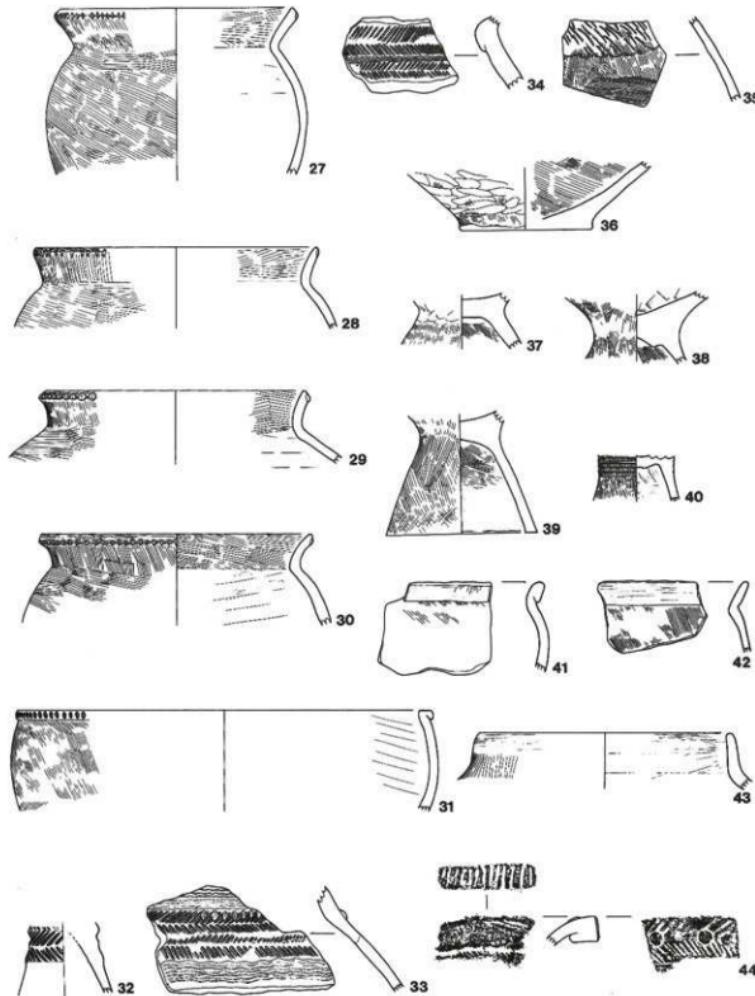


1~13=SB01内 (11·13=SP25内、12=SP27内)

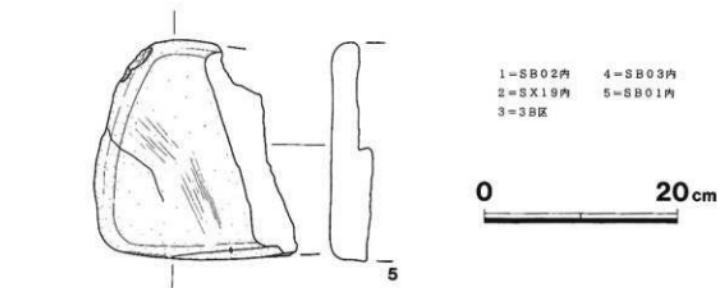
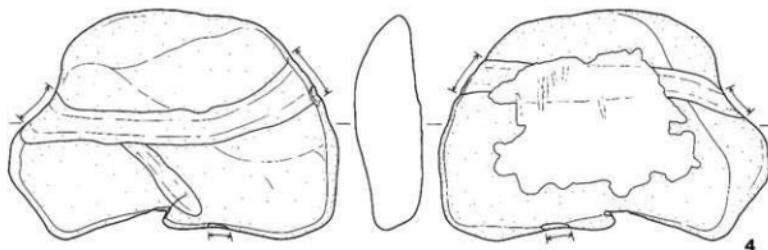
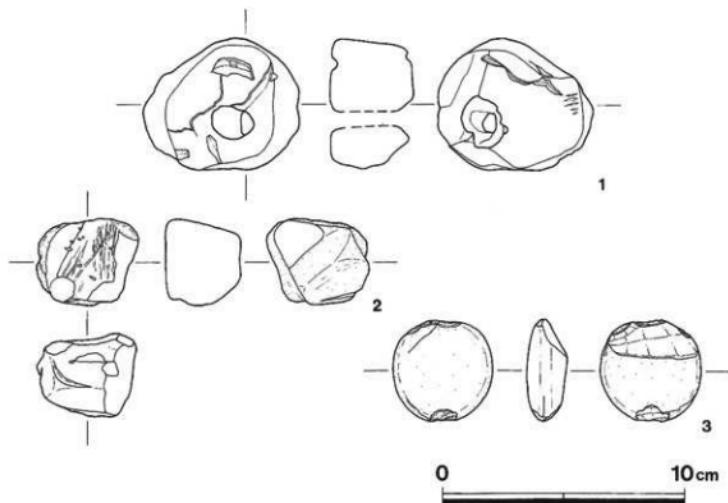
第14図 出土土器実測図(1)



第15図 出土土器実測図(2)



第16図 出土土器実測図(3)



第17図 出土石器実測図

### III まとめにかえて

今回の発掘調査は、きわめて小面積ながら、数多くの遺構を検出することができた。

ここでは、今回の調査の成果、過去の女高遺跡の調査の成果との比較検討、そして残された課題を提起することによって、まとめにかえたい。

今回検出された遺構は、溝状遺構4、竪穴住居跡3、掘立柱建物1、柱穴多数、性格不明な遺構などがあるが、調査区外に及んでいて全容のわからないものや、出土遺物に乏しく時期を判断しえないものも多く存在する。

このような制約のなかで、時期の判明するものとしては、近世以降の溝状遺構1（S D 01）、弥生時代後期の竪穴住居跡2（S B 02・S B 03）、古墳時代前期の竪穴住居跡1（S B 01）、古墳時代中期のピット（S P 87）、弥生時代後期の土坑（S X 19）がある。

これらの遺構のなかで注目されるものとして、竪穴住居跡と掘立柱建物があげられる。

竪穴住居跡は、確実なものはS B 01～S B 03の3基であるが、D-2区・E-2区内の地山直上の土は、少しづつ灰が混じる汚れた土であった。この汚れた土を取り除いた地山面は小さな凹凸があり、あたかも住居跡の掘方を思わせるものであった。残存が浅く住居跡の根拠となる炉、床面、壁面の検出はなかったものの、竪穴住居跡が削り取られた可能性もあるので触れておく。

弥生時代後期の住居跡は、平面形隅丸方形・隅丸長方形を呈し、掘方は中央部が高く、主柱穴あたりから壁あたりにかけてドーナツ状にくぼむものであった。壁溝は検出されず、炉は粘土を貼りつけたものであった。これらの特徴を、昭和57年度に検出された第1区の竪穴住居跡と比較すると、平面形・炉の形態・壁溝が検出されないという共通点を有するが、掘方の形態・規模の点では異なっている。また、住居跡の主軸方位も異なるものである。

今回、S字状口縁甕の時期の竪穴住居跡が女高遺跡内ではじめて検出されたことは、女高遺跡内の集落史に新たにこの時期を加えることができる。

今回検出された弥生時代後期の住居跡の主軸方位（S B 02がN-8°-W、S B 03がN-9°30'-W）と古墳時代前期のS B 01の主軸方位（N-7°-W）がほとんど同じであるのは、単なる偶然というよりも何らかの根拠があるものと思われるが、解明されるには至らなかったので、今後に残された課題といえよう。

調査区の北端で検出された掘立柱建物は、柱穴規模の大きさもさることながら、3m、4mという柱間にも驚かされる。弥生時代後期からS D 02開削の間までのある時期の建物としか言えない現状に歯がゆさを覚えるが、いずれ周辺部の調査が行なわれれば必ず解決される問題と思われ、これが解決されれば、女高遺跡の内容がまたひとつ明らかにされることになる。

このように、今回の発掘調査によって得られた資料は、女高遺跡の内容を考える上で大きなウエイトを占めるとともに、今後に残した課題も多大なものであると言える。



図 版





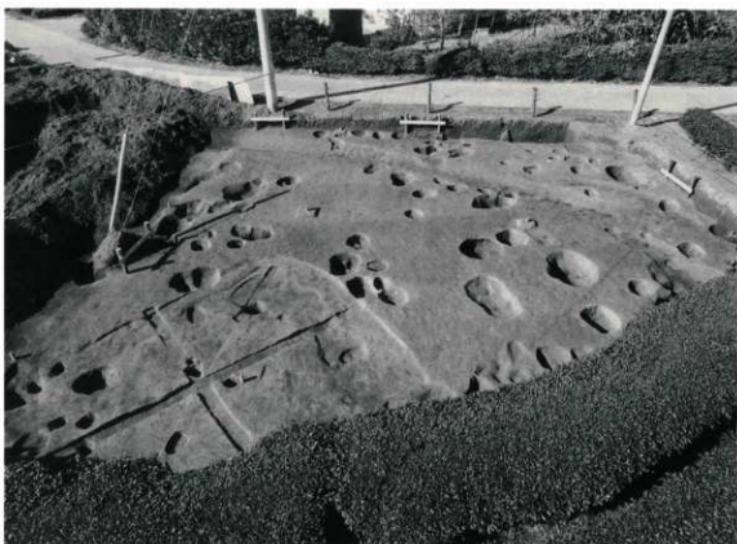
調査前全景（東より）



茶樹抜根風景（西より）

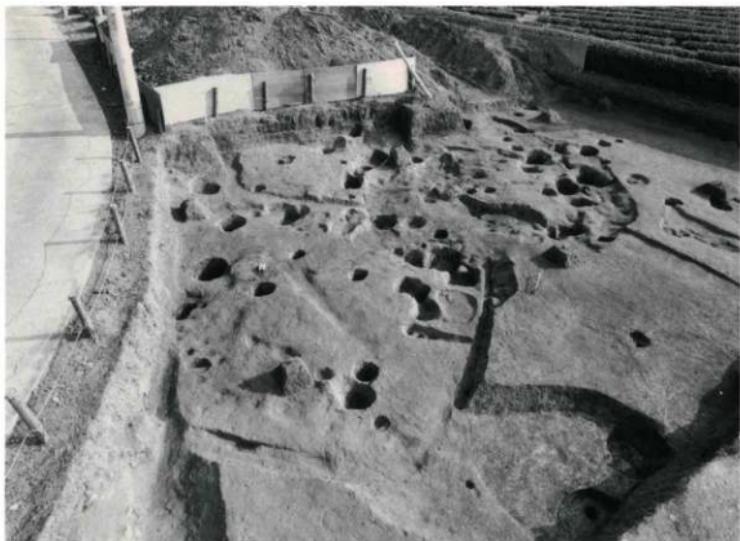


南調査区全景（東より）



北調査区全景（東より）

図版  
III



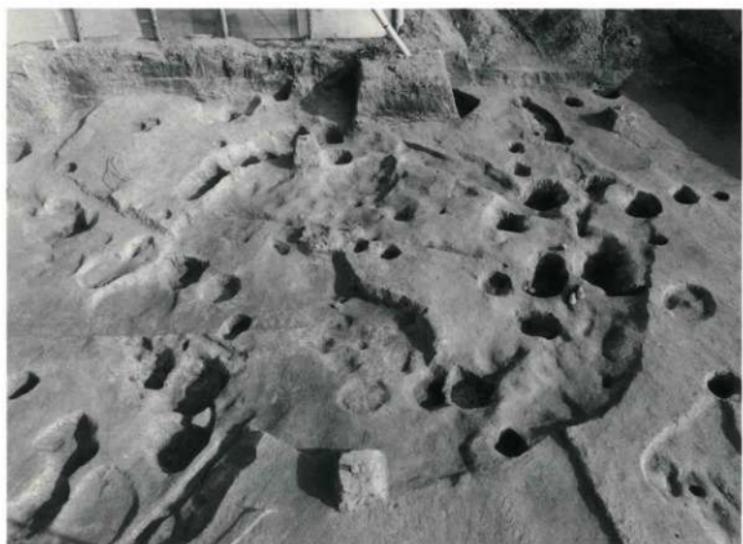
SB01(手前)・SB02(奥)全景(南より)



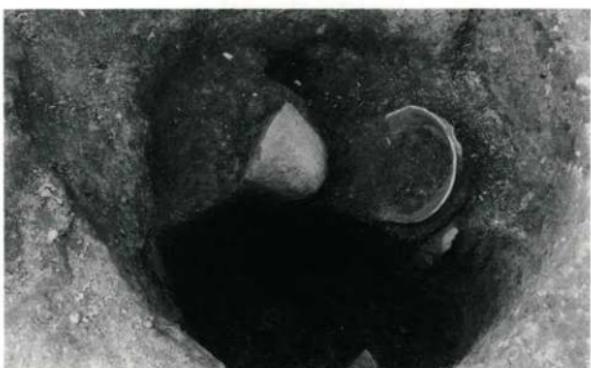
SH01(手前)・SB03(奥)全景(北より)



SB01全景（南より）



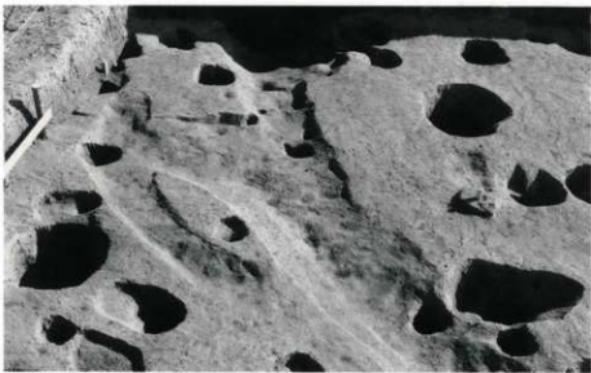
SB02全景（南より）



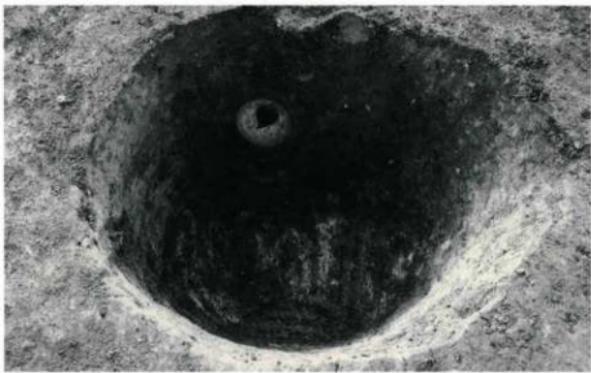




SB03全景  
(北より)



SH01全景  
(西より)



SP87内遺物出土状況  
(西より)



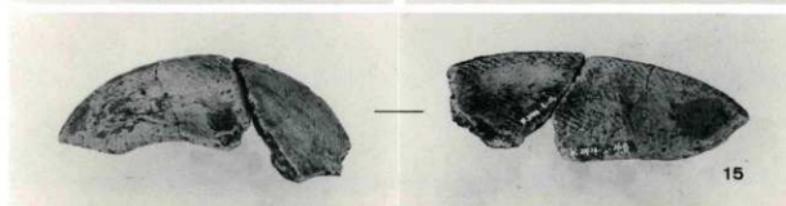
SD02-SX19土層  
断面(西より)

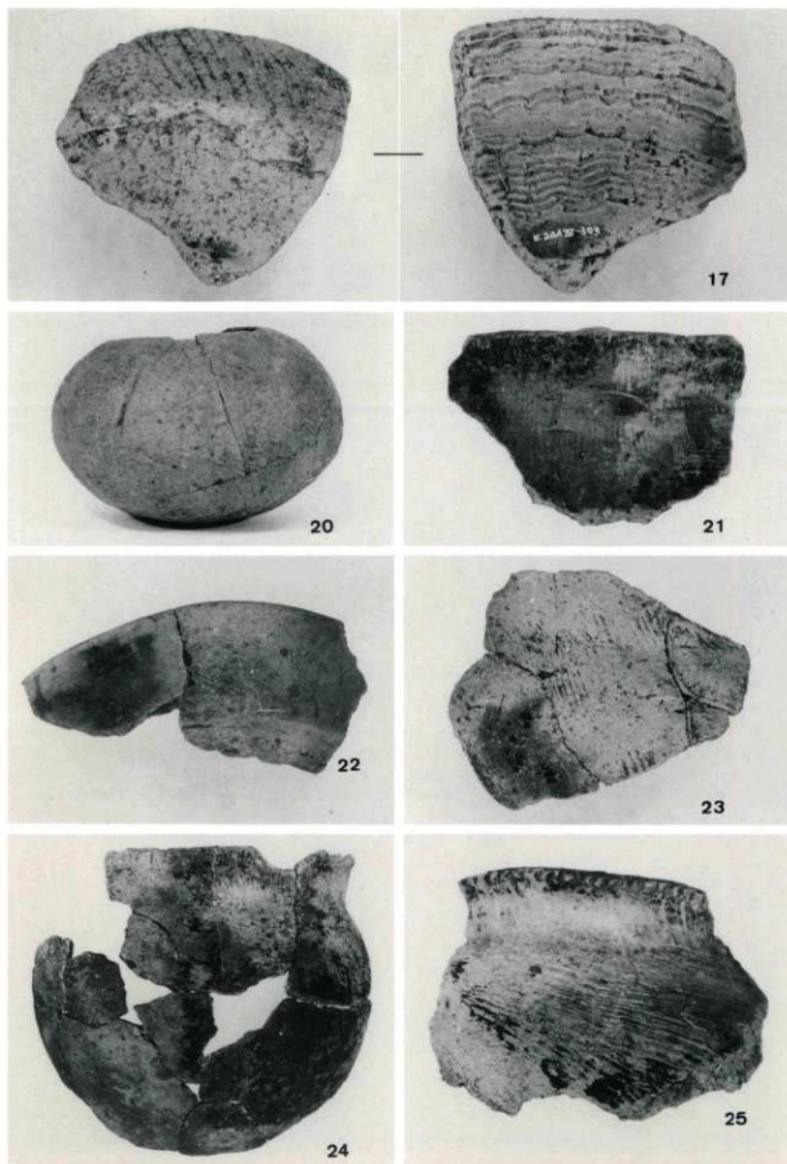


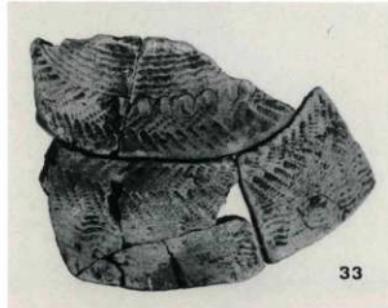
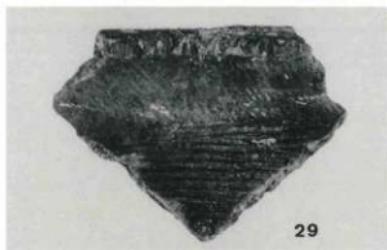
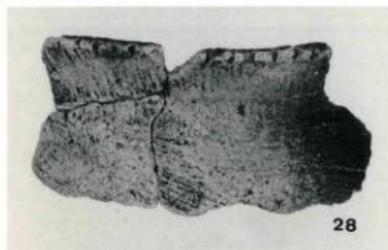
SX19内遺物出土  
状況(北より)



SX19発掘状況  
(西より)









2



3



4



1



5

女高遺跡

発掘調査報告書

平成元年3月31日 **234**

編集発行 掛川市教育委員会  
掛川市水垂51  
TEL(0537)24-7773

印刷所 株式会社 三創  
静岡市中村町166-1  
TEL(0542)82-4031



掛川市教育センター

掛川市教育センター